本朝弓馬要覽

駒馬大元記　全

参

ケ 5
95
3

大坪本流馬大元記　巻之上

序

あら玉乃祝ひ初め筆とりそめ初りし
をいねあら年の秋ふけ乃紅葉
さそひ出多徒と其事を西武士集て
見まほし弓馬ハ道を倭ことわかく長
きかくたうとく乃たまをとりひろ
しまと武士の家ハまれてを

京都帝国大学図書
蔵書

弓馬を以て道とはいとなものすり学文
こいふ事を此家業と思ふせんうしあ
ものすり弓を捨て書物をそして武を忘
て其事成者人を我田と捨て人の田を奪
ふ事ふかしきと形り其弓を乃ち八ッの
おしへあると流鏑る中遠的犬遠的八的挟
物附三々九々掾笠懸草庫将軍墓目見式
騎射八道とはいふすり又競るといへ共也

年旧久き術なりと賀茂神社より執奏
来まり皇室神文礼競るを四方日本
礼国政治の悪魔降伏天下安全礼神祈
禱に昔へ大門小昔を月日百
礼業あると事礼儀式礼喜式すと
乃へ伝礼今を鎌倉御代教剛
乙礼道とは流ありすると東温すと
今又武乃乃あるかしを礼御代みあの誇の

雲を乃虎乃風に結ぶ者なる仏法にて
大君の御徳にて学びうれく其徒を二千
人百人に及ぼしを家に伝へ事を右
実乃ふくと駑馬大元師の賀に寄せて
むすび人の心を志と世にはとるさへ
駑馬赤川をは弓馬の名れいやき筋も
さを稚田まれ道ふ乃り伝れ百一支
里奥をいへれをの長三寸に知り

ぬをは限を川上ふ向く龍門乃滝を
龍ふうんとおもふ志あるをといあり事も
千人乃徒に賀を祝乃伝りを記まり
ぶを孫陽伯楽乃如く二千五百の徒に
いうんふ代馬乃ひく身ふいうき乃
ひをを記れ朝を夕か蒙ひ伝り
て去年の秋遥を門弟ふ乃史に
右を奥しを行ると伝く伝こ

此わまりの取馬大元紀や號世り
のこし侍れとものかんうい

東武

駄馬大元師
齊藤定易自叙

大坪本流駄馬大元記 巻之上

目録

古實常駄
一六合袴策之事
一駄馬法策より三段之禮之事
一前乗之事
古實軍駄
一打物態之事

太刀討　討刀
野太刀　長刀
首掻刀

一手鉾態之事
一組討態之事
一芝擬之事

附白馬六曲之事

一唐鞍鳴和鸞之事

筋馬

一綾羅錦繡之事

曲馬

一日本曲馬之事
一朝鮮曲馬之事

大坪本流馭馬大元記　巻之上

東武　　馭馬大元師　齊藤定易集編

古實常取　林氏宮下
白湯同前

一、太元師策を取り給ひ軍神ふむうの六合祓
して祝詞をあげ奉る熱田廉湯八幡の三祓
を拜して策を腰に纏ひ六合祓乃
策を神道三種之大祓とも云とき德ある
策なり馭馬法乃人前乗れ者下乗乃時

大元帥進ずく大歳神おひく祝詞し
て元の所ふ動れそり

○前乗 おりの場 南南國寛永 ※宗不ニ場 扶桑 ※ニ場

ヲ出ずれ事ニそり此乃三返池七返乗術
此乃二返都合十二返そり隅ゑを三
返陽そり畑ゑ陽ふ向ひて騎上し
陽ふむじて下乗すれものそり口傳
奴百法を漢そり司馬法朝鮮ゑ理百司

そり共奴馬法を亦爰定乗勤るそり
先乗と元く腰ゑそる式玉女ふ向く
騎上して乗ものふ六合稜乃乗式
行く祝詞とわけ儀式乃ごく十二返れ
月数隅乃方圓と乗そりを乗ゑ三隅乃
礼ゑは初を乗式右れ掌ふそ騎上し
て右乃腕そりけ掌乃此乃ふ動時れ
此腕ふりをて左の掌ゑ術ゑ也下乗を

三兵形ふしてはしきそり

古實軍馭

馭る法　秋友定兼　吉八郎
對馭　九　義隣　伝助
對馭　村井猶久　忠治
對馭　増原定勝　幸十郎

打物態之事

歩兵合太刀三箇之戦

内甲戦　爪身戦　高股戦

歩兵合討刀三箇之戦

鳧鱗　飛鳥　鶴翼

歩兵合長刀七箇之戦　太刀　相長ち

水車　披手　薙手

虎乱入　懸込手　左儀波

右礒波
野太刀五箇之戦　五箇之秘事タル故爰ニ畧ス
手鋒態之事
手鋒ハ太刀三箇之戦
手鋒ハ長刀三箇之戦
手鋒ハ矢鑓三箇之戦
組討態之事
小手詰　柄折　實盛附

芝撫之事

芝撫を芝ハたらかす撫かすし撫ハ稱
ハ芝野おとしへ入て撫申
ごとく古人の名付ハ
芝撫ハ定業ハ撫ハ踏込撫と
芝撫ハ跡踏撫といひし人將
ハ夜ハ入簾乃中ハ申ハ
ハ蝦蟇ハ遊ハ撫ハ筒

て蝦蟇と射籠さるゝ乃ゆへ弥郎
撰ばれ名付られたり此人も弦射の
達人なれど西行法師乃流を汲てその
乃功なれ人ゆえい居り古き弦射の書
に見る其名見しるるかたの人なり
下立ゆえ以ても古傳ハ白る六曲ゝてもホ
ありきる定兼ゝ下立ゆえ前下後下なり
無場あり き而ゝ く前ゝ敵矢ゆえ

後へ下立なり後ゝ矢をもおへ下
立なり其事と勤ゝれ事なり

古實餝馬

唐鞍鳴和響　唐鞍　唐御
雲珠　総　鼻皮　杏花　杏
葉　八子鈴　銀西尾袋　方金
唐鞍綾羅錦綿　唐鞍　唐鞍　御轡
龍髪　龍毛総　鼻皮　拘蝶　胸総

錦繡後餞もまた

御者馳驅一参

唐鞍の鞍もまた鞍和書後藤鞍の鞍

和漢ともにおのおのかさりたるこころ

御餞物後陽成院乃御器来れる

あとをとへる詩丹太平天子長久日又

也雲車駕六龍と作也乃也嶋和書

也鞍りまりまり又和鞍乃鞍ゑまり移鞍

定兼 吉八郎 源仁弘道 源久右衛門

也鞍ありねり軍家随身兵杖牛車馬料

の為寮也鞍を御前乃前乃前也と御輿

乃後ろと後駆といひく其鞍小七口鞍

也鞍あるとき料といひて将軍家

及びこ大臣ゑまりて也乃鞍ゑまりと

ゑまへ

日本出馬 来人村井猶久忠治

盤立 飛越 関貫通

壹橋　下藤　水車

日本曲るを尊ぶの影ひまあれば武術乃引しまり古来細るを教へ引し様にまひらふまれせり此乃地勢を細るふ為とるべ

教引せさせて教へ漢より良る日本に細るより通法を其術とまれ人をして式と合まと細るを説り東海ふ教剣乃上流のおりう八面奪射知恵一足の細るを牽進せるを示乃文脈味くまるべきを作く示法屈判官能る進奏乃送文ふ伸也は千里と地せ屈ふ双六盤ふも立めへしと書をるを基解盤奈と仕迫れゆへなり

駿馬

盤立はなるを組討の打物なるなく
中に居るものも小紅丹に染なく河水流
渡をかぶりて居立をもり是ハ乃徳と
ゆく盤立を仕也ハ八ッの曲あると
皆武用乃常ハ家事なり右は理なて
押なるべし

朝鮮曲馬　田代忠一郎久

馬上立　馬上倒立　馬上横卧

馬上横卧

朝鮮曲馬上卿卧

朝鮮曲を教ふて其人ハ左
敵ハ乃て身を横たると教へとゆく仕也時
を朝鮮人ハ乃ものしく家事
る上立を立一参なりる上倒立ハなるる
一参なりる上横卧を横家一参なる馬
上仰卧を一参関貫通しなり天和乃
中ハ吳順伯。桂子廷ういなく代と日乃へ

来つるく世るとと来とし人と朝鮮の術と
仕業しられ者そしてい居り事若うし
伝其玄業と傳て呉頃伯と桂子廷も人
なりと人の為所をそなへきとしわと異
く其傳乃ちく御して日かうさなり
を迄と八曲の内六世を朝鮮人より学
ちりちり見故に色あり秋徒より其事
と来て伝人ま見せく日なあくを級

すれ事と初しめ為なり云れとも
あくく武用のたまけまをあうれ術を
迄て来く益好益をれとお少人伝
始てきあして其事を常小達者ま
次しくも及びうれ事をなりおの色ぬを
しく歓くまをかれあきひうと来てを事
とまとしなりかうれ術なり我つあ
てうくをまり

大坪本流馬大元記巻之中

競馬目録

競馬盛觴之事

競馬に真のあれ事

神事競馬之事

大門競馬乃事

競馬遅先して百術のある事

競馬の馬の法式乃事

勝負帽子の事
將結換れ事
標下の木の事
見定人市立れ事
策振童子の事
日記役の事
呼敷役の事
合征敷役れ事

男女の係るれ事
高声の云の事
競馬結番れ事
附 下れる傷物負の事
定下る傷物負の事
乘人出立の事
出場式の事

大倉本流馭馬大元記

馭馬大元師　欠藤定易集編

東武

鎌倉時代競馬

競る流鏑るの技術は古代乃道より禮綱本記は文明の大門あて競る并ひ流鏑ると親切ひ考ひ事を五月乃欽南北の夏冠式幸く陳と仰れ神天皇く武式ひ天皇元年後ひ儀ひ

ふ武士始めて武士と称ひ始めたり武を
太平乃ときより治代の君武かうんとあるか
爲なり其武術を競る流滴るより漢ふ
と八月五日競る武業も荊楚歳時記ふ
おくり始まる漢と云く係ふ勇ひしるして
を始め右ふ設ける古實なり和漢附合ふ
術なり天乃の教と帝とは神なり神乃道
と帝とハ天道なり神心なり發まる術なる

ゆへよ賀茂皇太神宮より當代事あり第て異
國乃乃武勇ふるふくを好
○競るふを其ふあるを久ふ事なり賀茂皇
太神宮の競馬あり大内ふ執行まる競
るあり武家ふとてあるひなる競るあり
鳥羽ふ此競るあり毛競るとて爲ると
別とふ時とさるひるとふ新とふ時を其ふ
ふるとふあり

賀茂競るとて大内乃競るを右へてかりるを
さしやいへとも皇太神宮の競るかは天る
あり標下と称員乃赤と白と皮人赤地と黒
文乃出立ゆり警固の人甲冑と黒を赤
手七番逆しこめれ傳わて赤地を左乃
方きれ文黒地を右乃方ききれ白紙
神書ゆ赤をきたゆをよりは黒をきき
きれとまわ是故ゆ赤裂米れ京八神

れ方ふかぞへ黒裂米を悪魔乃方に
きしてわをきをの、いらをよをきをよか
を競をきをぶをいらゆるをとをより
平ふ
侍乃ちらを物乃の繪ち員を
素り人黒 策れちうう
山部を神の競る乃事ちとをを
大内乃競るは式をはまびうふ史へちを

庭は軍競として其おに左右右大將
彈正兵部兵庫常刀左馬頭右馬頭大舍人
頭右馬頭左右に分て後員と競人と今年
れる頭先と右馬頭先と爲
をそり官人のお立を今れ繪書名甲
冑朱小袖書名頭甲冑と其をそり繪さ
頭方へは紙と結るそり者を條乃古き文
にまきく云頭事

競る此馬を迎を牧小舍人甲員せ
し馬と用ゆ是まき親を嘉俗君乙郷
此方まりとる牧あるまく競る乃馬ハ出
事そりと其るしまと集めて是抜ひと云
ものと書るそり見定人中木乃繪て
逸走と分て其位のるとる合を頭事
其是抜ひまづまく遠日小出小人ハ繪
そりまと負るふ雅を頭事

馬
中

競る進出してはあくまで乃術あんと古き法
みを見へ伯耆さりいさ十へ嵯元二年新日
右ハ八月合の八番乃素庵ハ大江を遠作
伯国文と結婚定ると遠を強力ハしく
ゐを上ハ乃大男さりと国文を小男ハし
て無力れさり必と国文負ると人と
云へを遠を必定強ハしと云ひいさを
進く前ハ立さり国文進てを遠と引

蔵と名遠蔵さまハ国文がる乃七すと挽
てら居へんとを国文を入るれ功少れ去さり
をれとを綱と捻羅と押ハして革首紙
打く走せさりを遠嚊と拉かし庵居ハ
例ハ国文乃馬嚊さく強折しく光りと
中判官親清を傷乃素氏を優しるら
共郎等ハを定九郎さを者打合くを
文乃の平首ハ抱付く横蔵を押南て

為さるべき四文揚て策と揚をなす
勝ふなど主上感感あらして綵二領と給り
なれたりおして競る業おしてい百鄉
ありせいなれをはし事なるへし
競る為馬乃法を繪員撹おして落るの
ちをする場へ揚て番ひ雪と寄見
定人揚策と振れ高き長く乗ゆるへ
し撹ふく為るれ時を落るの方負るふ

准をれたるまをれ右乃為馬の時を流
にたりて振れたり
競る繪員撹乃四面四面ふかり屋形に
作り迫幕とうして撹の内ハ呼敬合
拡敬と置事たり
撹乃内の床餝を置多置鞭置瓶ふ
と解れるも
侍結ゆうを串のさ地源より上四天横

は萩と云く一通結事なり
標下を賀茂乃競る此下木を掛なり
神秘あり餘金市代の標下々又結あり
て用れ事
見定人お立を皮ふりて巻束あり須
金市代を多分は直金代差…なると
いなり烏帽子無し小刀指策ふ束廣
扇子を指添れなり

策振の童子を立ふ小刀指高紀紙し
髪とも紀乃なり元結ふして策ふ束廣扇子
丸添へ指なり武人とふふお立同中
まったるあって右当ひり鞍を策ふ法陽
の鞍なり其振ひりに御ひり
日紀の役乃人お立素袍也稀に侍烏帽
子無小刀ふ束廣あふきを指なり中を結番
七付ひりの役を校ふ立記を事

馬鳥

馬鳥

まゐれとも素人大勢の時も紙を結
てもをるしるし
呼鼓乃役出立素袍長袴烏帽子ハカ赤
廣袖ふと拍子ものる呼鼓のあやうに
又陪の曙ひあり
合拍鼓の役か立も呼鼓の拍と同おなしり
呼鼓小拍ひく合拍鼓と合る事ハ二陪の
曙ひあり

男女共餅ゑの役を童子共役なり十二歳
より十又歳まてと男女共ゑれとも
前髪あれとも紙を用ひてしきなり
る帽を厚紙乃紅の唐紙と男女共
ゆ結を深たつか七すゝ付なれと男女へし
童子出立を水干に指貫童子烏帽子無
赤廣あのきと拍子ものる女共童子を花笠さし
唐紙結して水干紅乃袴美く赤廣袖

る と持ち競る色くを使ふ人ともに素
連くるゝ鼻と并て地乃こと迄七五郎の
地乃二返 初合十二返 年月乃返と素之口伝
男女の餅る素おさむ 拍と呼 鼓乃役幕と
下しく鼓と打 其鼓ふまき傳あり
る声 ゝ役を侍役 ゝ お立 小素 絶小袴 小力
拍く烏帽子 色して 搗下に 踞居て見定
人の作よりく主 物と 其持と 物と

流人ふまきを役を人を南へ
一人を少へ 流人ふ歩て主人乃姓
名と呼つゞし

移鎌倉競馬結番 かはる 場勝負

一番 左 儲勝 右 藤原定兼 古八郎
南部源 久義 俊之進

二番
左 右 持

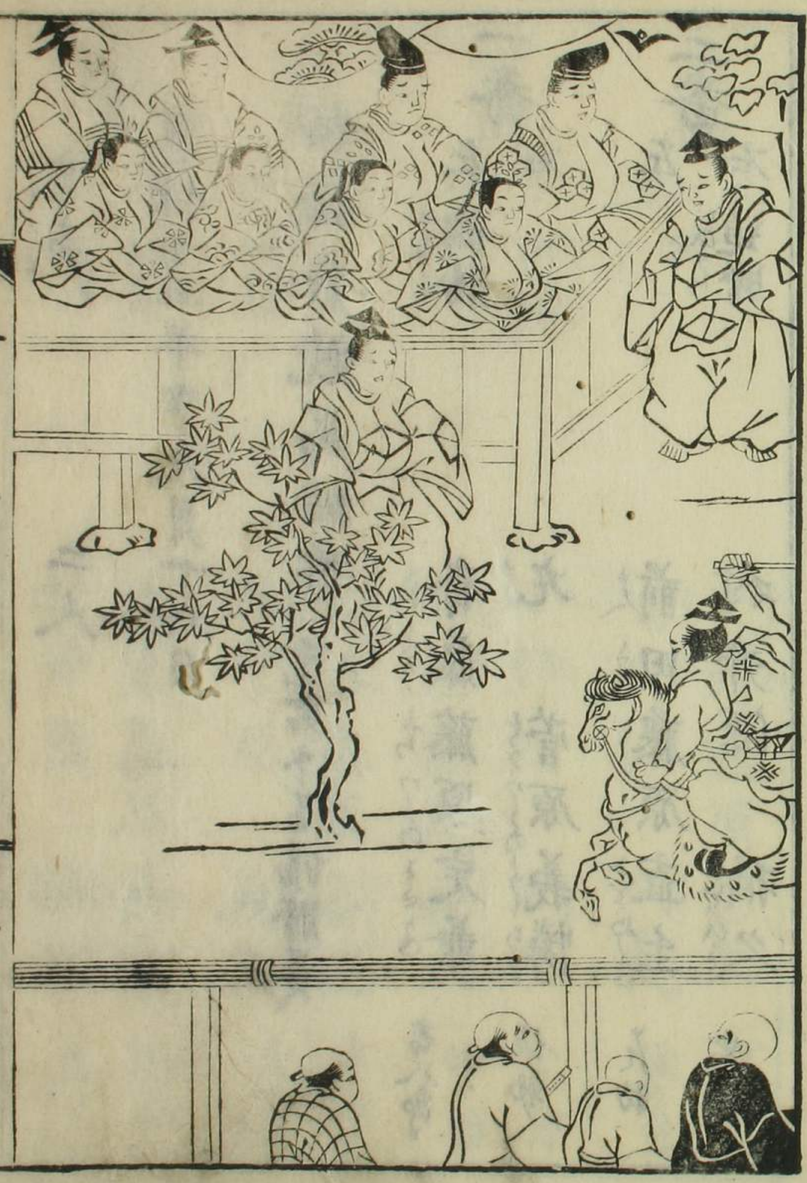
三番
左 勝流
右

四番
左 儲勝
右

五番
左 儲勝
右

月根野源弘恒 左次郎
村井源猶久 忠治
角南平國寛 圭水
飯野平常直 弘平太
黒田藤原有道 内藏
永田源正明 平之亟
日野源正脩 小三郎
飯野平常直 弘平太

見定人 射馬大元師 欽藤藤原定易 圭税
策振童子 欽茂松村
呼鼓 酒江九十郎
合征鼓 雨宮藤原政高 仲左衛門
男女餝馬 姫江藤原弘道 源左衛門
紀書 前田藤原兼忠 源左衛門



高声　二人

享保十三年申九月十八日

移鎌倉競馬結番　毛宮下る儲勝負

一番　左　儲勝　斎藤藤原定兼　吉八郎
　　右　　九　菅原義憐　作助

二番　左　　前田藤原直生　九助
　　右　追勝　村井源　猶久　忠治

三番　左　　天野藤原忠衆　四之郎
　　右　持　南部源　久義　浜之進

四番　左　追勝　日野源　正脩　小三郎
　　右　　粕屋藤原義武　伽之助

五番　左　儲勝　近藤藤原壽俊　半助
　　右　　九　菅原義憐　九助

六番　左　追勝　近藤藤原壽俊　半助
　　右　　村井源　猶久　忠治

七番　左　追勝
右

見定人　叙馬大允師　前田藤原直圭　左勝
　　粕屋藤原義武　伯勝
策振童子　斎藤藤原定易　主税
　　秋篠松村
呼鼓　伯江九十郎
合征鼓　武笠佐伯辰處　民部
　　堀江藤原弘道　源次郎

男女傍馬　右田庄太郎
　　面文改助
紀書　秋原源　重高　源次郎
　　二人
高声

享保十三年申十月十九日

素人の出立は侍烏帽子無て金紗の
羽織小袖金紗乃上衣浅黄指貫扇
無さる小刀根竹の策を身長にけて

腰にさして呼敲小路ひて棄却をきり

競馬出場

文叡乃役料紙硯と文叡に居へて目録
にあけて指出れたり之より日記乃役
一名陪ゝ歩をせへし策振乃童子
日記の役を一名陪ゝ二名小つゝ
へし分副の役二人押續てせ番日記
此役掛よりも文叡と紙し正面より向ふ

策振乃童子を日記
に垂て正面より向へし見定人を座し
ゝるを見て る道ゝを歩を出れたり 餝
馬此童子見定人を同一名陪て
へし勿論二行ゝ
と呼敲の役合拍敲乃陪を一名陪て二
せ小歩じ色しゝる声此ゝも一名陪て
二行ゝたゝび歩むへし見定原標下に

初り神拜して祝詞どあるを其日童
子及ひ太の役人ともかく踏居るの
ちも見定人擂より正面ゑむひ
座を敷時呼鼓乃人節と窺ひ見定人
作式ちと其時呼鼓とうち乘人鼓と
笑てる道ちり馬と乘おし先擂より回ひ
く一礼して其鉦鼓と注還して馬道
ちおて乘侍丹乘ちを敷ちり皆ありく

呼鼓と打ちる其時一番乃乘人二組
につちり乘出しこめとうけ七返くし
と乘ちと見定人其七返くしと乃く呼
鼓と打ちを呼鼓と笑て左右の乘人
る乃式ちの人擂と窺見定人るれく
ちひちと乃く乘とおを乘人乘と
合也初声とあけく馬式出とちを後く
此乘人まを一番小進して乘てちちの

へ〳〵標下に前へ引り引れ人攫まむひ
策とあけ面〳〵見定人を攫とよく見て策
と合せれ之見定人策と合せれと見く策
振の童子策と振るたもこと所呼數と合紙
數と合せくらべ其名を南北小
分て攫られ人の姓名と呼れ之二番三番
未くれ結番まる此けたり

大坪本流馬大元記 巻之下

草鹿目録
草鹿温鶴の事
山祢三口餅の事
草鹿換見乃事
草鹿小用扨弓此事
拾次乃事
矢漏鹿乃事

角総乃事
緩笠九事
射支器米の事
汐騰乃事
策乃事
麻掛やう附串九事
麻釣縄九事
馬具の事

麻鈍役乃事
日記役お揚の事
日記役を所お産やう乃事附麻渥九のり
換見乃事
漁業縄の事
移漁余市代菜麻射支く組おける揚九る
移室町家市代草麻射支を組おける
揚乃事

同移鎌倉御代草庶射を組宮下
る儀乃事
同移室町家御代草庶射を組宮
下る儀乃事
日記中付小平あれ事
矢評議乃事
清射云黄の事

大坪本流馬大元記　巻之下

東武　駒馬大元師　布藤定易集編

草鹿

草庶を鎌倉右大将朝公富士の狩倉
とおもうたあふまば相模山と狩しあ
そまふを弾れ射を庶流し射換
とれたり其門羽くと飾んて中れ矢
也ありきりと朝公を熊と浦らん

ありて下河辺庄司行平工藤庄司景
光豊田二郎季隆彼等ハ三士と云さ
也弱冠なり皆巻く南村弓馬乃達人
也三浦介義澄ハ彼ハ父義明上総介
廣常ハ勅使ハ下野国那須郡の妖狐
と称して上洛し御感ハ有るなと乃
指令功勲ハ彼等とめて四名あるへ
しと軍勢公実卿思ふく彼等又人と云

ふれ其故と俗合られ皆評定して廉ハ
あるへ矢毎乃廉とるとの疏と考へ弓絃
と外して打見ハ大概十一杖乃中ハ矢を
以巻茅廉の法しる弦巻ハ十一杖しくハ
止らるへ廉あるゆへよ十一杖と略して
九杖ハ宜ハ草とくく廉と作り弓梳
しるへ東鑑ハ建久三年八月廿日三浦
介梶原等乃武士と云れ俗産ハ

かくは御負あり手を拍合よりあるひて
うつかりは弓杖を拍合よりあるひて
射そる事を見へうり先と業所は
鑑鑑とはをれをのをり
山祇三口餅と大山祇神と拜をる
をり草庵と初く奥切をる時を
三口餅と俗へをそまつる事をり赤色
は餅白色の餅黑色は餅をりこと式

三通一巻乃餅と供をり其供物を
山を命の為と事をりを祝と撿見其
汲水准しく事と勤むれをりまる
三口喰は法式あり緣食市代軟勢の
為君萬歩君初く將食乃節軟勢
大友は通わ盛と甲三郎素隆と義君
は射士をして要水おりめ好をり
踏る士とかくとめる山を

東福寺の僧侶の業は伝授あり
為君一路乃庶子の中より分るると
あるとも其に相ぶらん代物なんて庶子
ゆゑ別庶留り名れを相朝公の
子なれども相ひ分れ小四郎矢
口師と称す其師三通より三口法
式あり初の一口を京光中比二口は季隆
終乃三口を為我結伝より祐信は京光

季隆の法は伝せくもを三口に
分かくは其長を為へきと伝とあるを
しを三口師共古来より其所あるゆ
ゑ見へたり
庶子は為き草と称る流より流合法
代と室町家法代を庶乃格より其所
あるを深金法代を庶と為て伝れること
く来て伝りて其格をあらくし矢

中乃里を射る是故小検見をす庶
に矢中さる射射よ矢声とあられと庶
の記ども見るく日記よ中と付さる事なり
宮所家ふいらりては庶とせた庶のお
るく作りて矢あらりれ墨あれうゆへに
いせ也乃不小中さるや中矢所紙乃るう
ゆへ検見と用さる記事さり検見を其
家りあらる徒を勤るる記事也武田

小笠原乃猪射乃書ると検見を射よ
にあんしてを其家るんく勤しるしへ
是小笠原家ふは小笠原信濃守小笠原彼
前守同彼お次郎同民部定武田乃家
武田大膳定大坪家ふは細川右京定
勝元朝日同幡守作て木かぶ賀守入乃多加賀
老後守高忠ふいさるもく大坪流の門人
さり改是流発を祝定易かは毛岩下

如馬場乃草庵換見を勤る事有り
弓を八張弓の内相伝弓と号れ申すを
彼是と宮町家の末より弓を教へ
とも用ゆれ事ゆり夜秋を塗末れ
弓と称冬春を白氏称といへり公儀
相伝弓にあらしてもつくるもの
○拾決を家この法あり諸乃間やうい格秘
事也古き書にも武士は軍をおもむく

度ごふ拾決と無る氏吉例とされとの
ゆりとも説て
矢と摘と篠ゆいそれまく物し事に
もりて正あり
角絵を古き正れ拍そり弓を郎ひ
より無れとの弓大乃時を弓を氏
るを氏無れ也
○笠を綾笠と古来市目笠とく賤男

此ものそれ笠の柾乃拍く其笠と菜
麻おもひ笠無小用也れなり
義小女上衣石帯虎鞘行騰芝等之
行騰乃下ハ小袴とくくるもの也
行騰をもてあれ事なり秋二毛ハ本式
なり夏毛の行騰ハ行騰と称事に用
ひ毛切なりに賀ひあり熊行騰虎豹行
騰水豹行豹乃行騰あり割合乃行袴も

麻乃白毛とおかふ者やまき塗行
騰あり老人なりふはたりろさ行
袴しい麻なり
策毛根竹の策と用れ事なり腕貫
此結毛腕ハ借くむとびそれなり
かとふれ結びかしして緒の未代葉の子
ひとひ小弟れものなり
麻毛春秋よりもくり柾小習ひ

馬場

馬場

あり串を木みく拵るなり笠鉞の串
長さ壱ひ庶を寸人に打鉞串よへ
せさる事なり
庶拘縄を赤縄と書縄と二文乃間と行
此如くに分ふ用ると知るへし
る具を敷て定れは冨士の巻物
の書あと毛くに馬よ何鞦おかくとる
あれとも定れ法形を立る是れ軍

家乃前近後近乃ふ用る七口鞦を
用捨あれ事なり
草庶お場
庶鉞乃役人三人を門を人を切者
なれを用れ事なり人を鳶帽子
素絶袴ふ二人を纏よ袴牛羊しあて
振乃男四人武人を串と拵出れ又二人へ
庶と拘へ出れなり

日記の役侍烏帽子小素袍袴と美しく束
廣わき持く小素袍美さる男に文
巻前小杖也又小素袍着する者二人引
連静小歩く日記者人
日記し者其所に居と居く麻
垣く者二人小素袍小袴着く杖持乃
杖と突二ツ歩く麻の山方左右立
休所

検見日記乃役所して正面小坐り
出と居と居く馬と乗出麻北小
山方小居同く組ものと呼ふ麻垣し
者出く着を附検見麻と居かと掛
居と同麻垣し者着く野分乃麻に
掛ていを覧あくしと云云繋よ限
て検見居静小加せく麻と乗出
掛する横と居く野分の麻よ掛する

とて日記所乃右方四人乃浦く屯也
扨也其屯と見くゝ弓を命乗出と吏
り限この射手乃面く乗出とそり
日紀所ゝおよいしりては所皆の礼と
用へし乗通る射庶弁むひて乗引
とすて乗り弁侍よ屯るそり弓を
命と押乃射手を馬場の四小屯して
検見とゝゝ検見策と腰り抜て腕ゝ

掛ゝ射手ゝ其氏見くゝ矢と蒙ひる
と静ゝ出と也射手一乗り射しる附検
見居ゝりて左右乃矢所氏吟味とる
○藻美縄を一枝ゝ鳥居そり紫八用拾
わゝへし宮町家の書よ紫を御所掛る
らくは無ゝ屯ゝ屯ゝ屯ゝ屯ゝ常人
を浅美黒糸ゝ折吏ゝと云ゝ人しと清
射乃書ゝもゝゝゝ紀を遣屯ゝ

ゆ人老人少人を志うへしとて山猟元
縄を小笠原武田大坪流よりふるまひ
ける義家公の秘事ふかそうて軍敗
又稚乃博の内まと入らるる縄すり
尋と元指ふかい伯あるり

移鎌倉御代草鹿射手々組 なかい

山神三口之餅 駿馬大元師

齊藤藤原定兼 吉八郎 ●●●○○○

齊藤定易 主税

近藤藤原壽俊 半助 ●●○●○●

織田平 信興 刑部 ○○●●●●

鳥居平 忠寧 主計 ○○●○○○

村井源 猶久 忠治 ●●●○●●

堀江藤原 弘道 源蔵 ●●●○●●

角南平 國寛 主水 ○●●○●●

日記 飯野平恒春 彦作

享保十三戊申九月九二日

馬騎
十五

馬騎
十六

移室町家御代草鹿射手々組 名ロ

太郎 斎藤藤原定兼 吉八郎 ○○⊖⊖●●

近射士 近藤藤原壽俊 半助 ○一⊖○●●

織田平 信興 刑部 ●○一●一●

鳥居平 忠寧 主計 ○●一⊖●●

村井源 猶久 忠治 ●一●●●●

堀江藤原 弘道 源蔵 ●一●●●●

押 角南平 國寛 主水 ⊖○一一⊖●

駿馬大元帥 検見斎藤藤原定易 主税

日記飯野 恒春 彦作

享保十三戊申歳九月廿二日

移鎌倉御代草鹿射手々組 雲宕下ろ傷

駿馬大元帥 斎藤藤原定易

山神三口之餅

弓太郎 斎藤藤原定兼 吉八郎 ○○○⊖●一

近射士 鳥居平 忠寧 主計 ○●○一●●

九菅原　義隣　作助　●●●●●
前田藤原　直主　左助　●●●●●
村井源　猶久　忠治　●○一一○一
堀江藤原　弘道　源太郎　○○●一●●
近藤藤原　壽俊　半助　●●一一一●

押

日記前田藤原兼忠　源太郎

享保十三戊申歲十月十九日

移室町家御代草庫射手六組　毛宮下百場

弓太郎　斉藤藤原定兼　右八郎　○○○●●●
近射士　鳥居平　忠寧　主計　一●●○●一
前田藤原　直主　左助　○●○●一○
村井源　猶久　忠治　一●○○●一
堀江藤原　弘道　源太郎　●○一●○●
九菅原　義隣　作助　○●○●一○

押

近藤藤原　壽俊　半助　一●一○●一

駒馬大元帥　検見　斉藤藤原定易　主税

日記　前田藤原兼忠　源氏

享保十三戊申年十月十九日

○日記中何もの物とも奉こにもとくをも不
われ事をもり理なるひをくして八勤うる
き役をもり

○電宮下ち湯ゆく室町家草庶の打
う後原れ壽後乃矢小脇をもて乃矢わり
満こ乃ものの矢あり物をれ少人矢評議を

あり物れをもり
弓太郎後原定兼の早矢中ものる少人
検見矢声ど矢をもと弓武出し
矢而と見て弓ものれ紀して其出立其
然と称英とをもる也近射士の只矢
をもりものれ少人紀ものく称英と
矢押乃早矢をひもを中ものれ少人
矢武称英をもの乃べるもり其称英皆

古実を以てのゝる事これを草麻ゝ
弓太郎押近射士乃るの立所ハ古来
より賞翫乃所なり太乃時ハ乃ゝ立
所笠懸に上下乃立所ゝく行義其
日乃賞翫の立所なるへし是ハ検
見録を以て事なり口傳
草麻と唱へ菓麻を以よ習ひあり
八麿的八的の習ひあり笠。懸といひ

きりて唱へるゝ笠懸とつけてゝ
習ひあり事なり加りてあるを弓馬
ふけいの業とゝ不云ゝあるを古来
より其法其傳ある事なるへし

書林　日本橋通一町目
須原屋茂兵衛